

きねぞうだぬき

杵造狸

萩原の岡根山に、昔から杵造狸が棲んでいました。岡根山は昼でも暗いくらいに木が繁っていて、その山の下の道を通っていると、杵造狸に小石をゴロゴロと落とされるので、皆が恐ろしがって、小走りに通ったそうです。

西家へお嫁に行ったお婆さんが、まだ娘の頃、夜なべ仕事(夜にする仕事)に女ごし連中と糸引き車で糸をピンピンと紡(糸をつなぐ)いでいました。その時、裏の川原の方で、

「嫁入り、ヨイシヨウ娘の嫁入りだ、ヨイシヨ、ヨイシヨ。」

と大声で張り上げる賑やかな掛け声がしました。

「今夜の嫁入りは、大家の嫁入りらしい。」

と、裏の土塀越しに見ると、提灯の火がついたり消えたりして、嫁入りの行列が岡根山から川原を渡り森安林の方へ長く続いていきます。空にはチカチカ星が光っているのに雨がパラパラ降ってきます。

「杵造狸の嫁入りじゃあ。」

お婆の大声おおこゑに糸いとを引ひいていた女おなごし連中れんちゆうが飛ぶとように走はしって行いって、塀越へいこしに見みていました。みぞがあつたのか、「プイコラシヨウ」と掛け声かけこゑをかけながら、次々つぎつぎに渡わたっているのが見みえましたが、間まもなくかき消けすように見みえなくなりました。

春はるのおぼろ月夜つきよ（ほのかにかすんだ月つきが出ている夜よる）、岡根山おかねやまの下したを流ながれる川原かわらの水みずの中なかを、一人ひとりの男おとこが行いったり来きたりしているのを、通とおりかかったおじいさんが見みました。刻ときみ煙草たばこをつめマッチの火ひをつけてプカプカふかしてじつと見みていました。狸たぬきは煙草たばこが大きいだいなので、逃にげたのか、その男おとこも気がきついて、道みちへ上あがってきました。シヨボシヨボに水みずに濡ぬれたその男おとこは、若い頃ころ、相撲取りすもうとをしていた「滝たきの音おと」と名なのる強つよいおじいさんであつたのには、驚おどろいたといっていました。

西新屋にしんやの三代前さんだいまえのおじいさんが、山やまの下したの稲田いなだに、晩ばんに水車みずぐるまを踏ふんで水みずを入れていました。すると、品ひんの良い美人びじんの奥おくさんが、フーとあらわれて、「作治さくじ、水みずはいったか。」と聞ききます。おじいさんが、「へえ、やっと入いりました。」と答こたえたら、スツと消きえて見みえなくなつてしまいました。さては杵造狸きねぞうたぬきのやつが、てんご（いたずら）しに來きたと思おもつてぞつとしたそうです。

うちの古ふるいおじいさんが、晩ばんおそく田たに水みずを入れようと、カンテラ（昔むかしのランプ）をさげて通とおっていると、裏うらの道みちいっばいに白しろい大きな牛うしが寝ねころんでいました。「オウオーオウ」とびっくり声をあげました。家の内うちで、糸車いとぐるまで糸いとを紡つむいでいたお婆あさんにまで聞きこえたそうな。白しろい牛うしはどこいこの家いえにもいおまいと思おもい、これも杵造狸きねぞうたぬきのいじわるだなあとと思おもつたそうです。

地藏院じぞういんの中興ちゆうこうの祖そ、法院行信ほういんぎやうしんというお坊ぼうさんが西丸井にしまるいの実家じっかへの行いき帰かえりには、岡根山おかねやまの下したの道みちを通とおるのがふつうでした。杵造きねぞう

狸だぬきがで出るといみちうのでガまよンジじぞうョウジせきひの道たに、「魔こん除びらけ地ごり蔵まる」の石しちり碑きざを建まって、それおに「金きん毘び羅らへ五ご里り、丸まる龜かめへ七しち里り」と刻きざみここんでお祀まつり
しまました。ふたぬきしすがたぎに狸みは姿みを見みせななくななったといいます。その碑ひは今いまも残のつていまますが、バイどパス道どう（迂う回かい道どう路ろ）が通とおったため、
墓ぼ地ちの中なかに安あん置ちされていまます。



『ふるさとむかしむかし』大野原町より

〈藤川政恵〉